

# Educo

地球時代の教育情報誌 エデュコ

NO.5 / 2004年 秋

ちっぽけな自分勝手が、  
深刻な社会問題につながっています。

🌐 地球となかよしインタビュー  
森と川の国連ができる日を夢見て C.W.ニコル ②～③

知っておきたい教育NOW  
① 学習指導要領と 発展的な学習 工藤文三 ④～⑤  
② 本場に「ふつうの子」が あぶないのか 斎藤次郎 ⑥～⑦

有田和正のおもしろ授業発見! ⑤ ⑧～⑨

りんごを育て、生徒をはぐくむ 前田鉄昭 ⑩～⑪

インフォメーション 北から南から ⑫～⑬

BOOK REVIEW ⑭ / 現代の家族と次世代を育む力 その1 渡辺秀樹 ⑮  
ほっとな出会い 栗山英樹 ⑯



地球となかよし  
インタビュー

# 森と川の国連ができる日を夢見て

C.W.ニコルさん

(作家・アフアンの森財団代表)

長い目で見れば、森や川が復活すると、少しずつだけど必ず経済がよくなります。教育がよくなり、もちろん健康にもいい。海もきれいになり沿岸の漁業もよくなります。それからレジャー、ツーリズムなどいろんな恩恵を与えてくれます。

◆英国ウェールズ生まれのニコルさんが日本国籍を取られたのはなぜですか。

僕は幼い頃から自然の中で遊んだり、動物と一緒に過ごしました。八歳から馬に乗って、一歳から散弾銃を持ってウサギ狩りをしていますね。もともと学校が嫌いだったんですよ。その大きな理由の一つは、ウェールズの文化を学校が認めてくれなかったからなんです。僕が通ったのは英国の学校で、ウェールズ語をしゃべろうとすると殴られました。いまはそんなことは絶対ありませんが、あの当時は、まだ一九世紀の教育意識が強かったですね。英国が世界一という考えで、僕はそういう考えにどうしてもなじめず、学校でいじめられました。そうなるか、自然に逃げるか、体を鍛えて強くなるか、自然に逃げよう。僕はその両方選んだわけですね。

一七歳で初めてカナダに行き、北極地域の野生動物の調査などに参加しました。カナダで環境庁の仕事をしていて、最後の仕事は緊急係でした。この仕事は、い

ざとなったら軍の施設にも入るため、カナダ国籍を取りました。僕はカナダは大好きですが、フットボールやアイスホッケー、バスケットボール、そして野球に興味がありませんから、カナダ生まれのカナダ人とは話題がいつもずれちゃうんです。彼らと同じ教育を受けていませんし、それに、どちらかというとカナダでは北極の人たちとか、少数民族の人たちと一緒にいましたので。

その後、僕は一九六二年から日本に住んで、みんなにとってもやさしくしてもらいました。日本からいろんなものをもらったのです。そんな僕が日本に忠実でなかったら嘘です。そして、一九九五年に日本国籍を取りました。もちろん、僕は日本の義務教育も受けていませんが、同じくらの歳の日本人だったら、野球、ゴルフ以外のことならだいたい話合いますね。

以前、ウェールズに帰った時、僕が日本人になったと言ったら、「よかったね。日本人になるのは難しいのに、よく認められたね」と喜んでくれました。

◆ニコルさんを惹きつけた日本の魅力とは何ですか。

まず、日本のよさは日本の自然にあると思います。国土の六割以上が森で、質はいろいろありますが、ヨーロッパのどの国々よりも日本の自然には多様性があります。長い海岸線を持ち、生物が多種で、環境も実に多様ですから、モザイクのようにいろんな文化を持っています。そこがとっても気に入っています。

それから、日本は植民地になったことがないので、元植民地に特有の被害者意識というか、嫌なところがないのいいですね。植民地支配から独立して五世代たつたいまでも、何かと攻めた国のせいにする、植民地メンタリティーを全然持っていないですね。

また日本には、言論の自由や宗教の自由があります。意外にそうでない国が多いですよ。例えばアメリカでも、そういう意味では本場の言論の自由はありませんし、宗教について自由に議論できない国も少なくありません。そして、何より僕がいつも自慢してい

## C.W.ニコルさん プロフィール

1940年英国南ウェールズ生まれ。17歳でカナダに渡り、北極地域の野生動物調査を行う。22歳で初来日、その後も二回にわたって来日し、1980年から長野県に定住、執筆活動が続けるとともに、1984年より荒れた森を購入し、生態系の再生に取り組む。

主著『ティキシ』(角川書店)、『勇魚』(文芸春秋社)、『風を見た少年』(講談社)、『裸のダルシン』(小学館)など。



るのは、日本は平和な国であるということ。第二次世界大戦の後、平和を約束し続けています。それに比べて、僕が生まれた国は、いまだに戦争をしています。日本人は平和の尊さをよく知っていますね。





◆逆に、ニコルさんから見て、日本人のこういうところが気になるということがありましたら、率直にお聞かせください。

最近、少し気になっていることがあります。我々はいま一生懸命森をつくっています。そこには美しい花がたくさん咲きます。ところが、蘭のようなお力になる花が盗まれるのです。また、珍しい美しい蝶をとって行く人がいます。栽培している椎茸も、八割が盗まれてしまいます。人の目がないとコソコソと自分勝手になってしまうのでしょうか。それがいま、大胆になってきていると僕は感じています。農家の人が丹精込めて栽培したサクランボとかリンドとかコマまで盗まれるようになりました。

そしてもう一つ、虐待を受けている子どもたちの数が増えていますよね。これはその理由をちゃんと議論して理解して、虐待を受けた人がまた虐待をするという悪循環に陥ってしまいます。盗みも児童虐待も、「ゴミの」ポイ捨てから始まると僕は思います。自分の

ことしか考えない身勝手な行為であるという意味で、両者は根っこが同じだからです。人の痛みや他の生き物のことを考えないちっぽけな自分勝手な、深刻な社会問題につながっています。

かつて「人間とムツゴロウと、どっちが大事か」と言った政治家がいました。こんな独善的な議論を耳にすると、僕は腹が立ちます。古来、武士道では、自分を捨てるとか、弱い者を守りなさいと教えていて、日本にもともとそういう考えはなかったはずですよ。



◆さて、いま環境保全が全人類の課題になっていますが、日本の現状や環境対策をどう見られていますか。

日本では、省エネルギーの機械や車、汚染を防ぐ技術など、いろんな技術がものすごく進んでいます。けれど、一方で経済の発展の名の下に、自然を「ポイ捨て」していますね。例えば、以前は北海道から北九州までシャケが上がつて産卵していた川が何百もありました。長野の松本あたりでも日本海から大量のシャケが上がつて産卵していましたが、ダムや砂防ダムの建設などによって、その自然の恵みを全部殺してしまいました。

長野には、現在、医療廃棄物や産業廃棄物の不法投棄場所が、我々が確認しているだけでも二〇〇〇か所あります。そのほとんどが水源地の近くです。我々の小さな森からも、いい水

が流れています。少なくともそのうちの何か所は、赤ちゃんに飲ませてでも大丈夫な水です。そんないい水が流れています。が、その先にゴミ捨て場があると、下の方はもちろんダメになるし、上の方もおかしくなるんですよ。一部の心ない人たちによって、貴重な自然が失われているのを大変残念に思います。

また、長野にはたくさんダムがありますが、まだあと一三つくる計画があります。砂防ダムも五〇〇から七〇〇つくるようになっています。いくらダムをつくっても、三〇年くらいすると沈殿物でいっぱいになり、何の効果もありません。いろんな自然も失われます。イワナもシヤケもアユも上がってこない。社会的にはものすごくマイナスです。

長い目で見れば、森や川が復活すると少しずつだけ必ず経済がよくなります。教育がよくなり、もちろん健康にもいい。海もきれいになり沿岸の漁業もよくなります。それからレジャー、ツーリズムなどいろんな恩恵を与えてくれます。それなのに、目先の利益しか考えていない人たちが自然を破壊している。人間にとって何がいちばん大事かを本気で議論して欲しいですね。

しかし、批判をするだけでは何の解決にもなりませんので、二〇年くらい前から、どんな小さいことでもいいから、できることから率先してやってみようと思うようになったんです。

◆その一つが「アフアンの森 づくりなですね。その活動の内容と、今後の構想についてお聞かせください。

そうです。僕たちは長野県の黒姫で、放置されていた里山を少しずつ買い足し

て、森の再生に取り組むことにしました。「アフアンの森」の名は、僕が生まれた南ウエルズにある一万エーカーの「アフアン・アルゴード森林公園」にちなんで名づけました。

荒れている放置林を復活させて健康な里山にして、将来は原生林の状態で戻そうと計画しています。一〇〇年かけてと考えています。

それから、里山にどんな昆虫、鳥、動物などが棲息しているか、何の木があって、どのくらいドングリが落ちていいるか、水はどれくらい流れているか、そういったことを小規模ながら総合的に調査しながら、生態系の再生を図り、森を守っています。

そして、虐待を受けた子どもたちや体の不自由な子どもたちの安らぎの場所として森を活用しています。ただ、大勢の子どもたちを森に入れて、フクロウが巣箱に帰ってこないとか、鳥の数が減ったとか、そんなことにならないよう、どのくらいの人数が適当かを考え、自然との共生を大事にするよう配慮しています。

また、我々は南ウエルズの「アフアン・アルゴード森林公園」と姉妹森になっているので、国際交流にも強いパイプがあるんですね。そのうちに「我々も姉妹森になりたい」というところが出てきて僕らが認めると、トライアングルができます。次に、その三か所がまた別の森とトライアングルをつくる。そうして、あと一〇〇年くらいしたら、森と川の国連ができるんじゃないかな。お互いを尊敬しながら交流して、森づくりが広がっていいと思います。

ささやかな取り組みですが、お世話になった日本に、少しでも恩返しができたと思っています。

# 学習指導要領と発展的な学習

## —その基準性の明確化—



国立教育政策研究所・教育課程研究センター 工藤文二

平成15年12月の学習指導要領の一部改正によって、学習指導要領の基準性が一層明確にされるとともに、学習内容の習熟の程度に応じた指導や補充的な学習、発展的な学習などの個に応じた指導の充実が図られることとなった。以下では、学習指導要領の基準性の一層の明確化の意味やその影響、今後の課題等について考えてみたい。

### ■教育課程の基準とは何か

各学校で教育課程を編成する際の諸条件には、次のものがあげられる。

#### (1) 授業時数及び授業日数等にかかわる条件

- ア. 各学年、各教科等への授業時数の配当
- イ. 年間の授業日数や授業の始期と終期、授業週数
- ウ. 授業の単位時間

#### (2) 指導内容の編成に関わる条件

- ア. 指導内容の教科等への区分
- イ. 各教科等の各学年への配当
- ウ. 各教科等の指導内容の範囲と程度
- エ. 各教科等の指導内容の取扱いの順序
- オ. 教科等の区分によらない取扱い
- カ. 必修と選択等の履修の方法

これらの条件に関する規定は、学校教育法施行規則及び学習指導要領によって定められている。学習

指導要領の基準性とは、教育課程を編成する際の諸条件について、学習指導要領が持っている制約の内容や性格のことを意味する。

例えば、上記(1)のア. の各教科等の年間総授業時数については、学校教育法施行規則において「標準」とされている。(2)のア. の教科等の構成、(2)のイ. については、学校教育法施行規則及び学習指導要領で明確に規定されている。

今回の一部改正で問われた基準性とは、上記の条件でいえば、(2)のウ. に関わる基準性である。即ち、各学校で各教科等の学習指導を進める際、学習指導要領に示す指導内容の範囲や程度について、例えばどのような場合に、範囲を広げたり、程度を高くしたりしてよいのかという点である。

### ■学習指導要領の基準性の変遷

#### (1) 授業時数に関する基準性

次に学習指導要領の基準性の変遷について概観すると、授業時数については、昭和33年学習指導要領では、次のように最低の授業時数として定めていた。「(2)上掲(1)の表に示された授業時数は、年間の最低授業時数であるから、各学校においては、下記『3特例』に示す場合を除き、この表に示す授業時数を下つてはならないこととなっている。」

その後、昭和43年(小学校)の改訂で、「標準」とされ、現在に至っている。この「標準」の意味について、小学校学習指導要領解説総則編では、「通常、この通り実施することが期待される」としながら、下限は、各教科の目標を実現し内容を指導できる限度、上限は、児童の加重負担にならない限度としている。

#### (2) 指導内容に関する基準性

指導内容については、その範囲と程度、取扱いの順序などが中心となる。この点については、昭和33年学習指導要領以来、基本的な考え方に変更は見られない。

昭和33年小学校学習指導要領では次のように記述されている。「第2章に示す各教科の内容に関する事項は、特に示す場合を除き、いずれの学校においても取扱うことを必要とするものである。各学校において、特に必要と認められる場合には、第2章に示していない事項を加えて指導することをさまたげるものではない。」

ここに示されている基準とは、学習指導要領で定める指導内容はどの学校でも取り扱わねばならないという意味で、いわば「共通性」に関わる基準性を指している。この共通的な指導内容に加えて、学校によっては、内容を追加して扱うことを許容しているわけである。

続いて、指導の順序に関する規定も昭和33年学習指導要領以降変更は見られない。

#### (3) いわゆる「はじめ規定」

平成15年の学習指導要領の一部改正で明確にされたのが、各教科の「内容の取扱い」に示されているいわゆる「はじめ規定」の扱いである。「はじめ規定」とは、具体的に「〳〵は取り扱わないものとする」とか、取り上げる事項の数を制限することによって、内容の範囲と程度を示す役割を果たしてきた。これまでは、教科書検定においてもこの「はじめ規定」



が適用され、一律に遵守されてきたといえる。今回の改正では、この点について、「すべての児童に対して指導するものとする内容の範囲や程度等を示したものであり、学校において必要がある場合には、この事項にかかわらず指導することができる」とした。つまり、15年改正の特色は、これまで包括的に示してきた学習指導要領の基準性、即ち、学習指導要領に示していない内容を加えて指導することを許容する規定について、「内容の取扱い」の部分にまで踏み込んで定めたものと捉えることができる。

## ■共通的な基準にかかわらず指導できる事項と指導方法

### (1) 「加えて」と「かわらず」指導できる事項

15年改正では、学習指導要領に示す事項に「加えて指導」できることや、「内容の範囲や程度等」に「かわらず指導」できることを明確にしたが、それでは、「加えて指導」できる事項や、「かわらず指導」できる事項とはどのようなものが課題となる。このことについて、学習指導要領では明示されていないが、教科用図書検定基準等を参考すると、次のような内容が該当すると思われる。

- ・上の学年や上の学校段階で示している内容
  - ・下の学年や下の学校段階で示している内容
  - ・いずれの学年、学校段階でも示していない内容
  - ・いわゆる「はじめて規定」の制限を超えた内容
- (2) 指導方法としての補足的な学習、発展的な学習等
- 一部改正により、学習指導要領の示す基準にかかわらず指導できることが明確にされたが、このことを指導方法の例として示したのが「補足的な学習」や「発展的な学習」「学習内容の習熟の程度に応じた指導」である。

「補足的な学習」「発展的な学習」は中学校選択教科において示されていたが、今回の改正で、小・中

学校ともに明記されることとなった。「学習内容の習熟の程度に応じた指導」は、これまでの中学校から小学校にまで拡充されている。

| 平成15年一部改正により追加                                                                                                               | 平成10年告示                                                                                                                  |     |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・学習内容の習熟の程度に応じた指導</li> <li>・児童の興味・関心等に応じた課題学習、補足的な学習や発展的な学習などの学習活動を取り入れた指導</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・個別指導</li> <li>・グループ別指導</li> <li>・繰り返し指導</li> <li>・教師の協力的な指導</li> </ul>           | 小学校 |
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒の興味・関心等に応じた課題学習、補足的な学習や発展的な学習などの学習活動を取り入れた指導</li> </ul>                            | <ul style="list-style-type: none"> <li>・個別指導</li> <li>・グループ別指導</li> <li>・学習内容の習熟の程度に応じた指導</li> <li>・教師の協力的な指導</li> </ul> | 中学校 |

表 指導方法等の例示

## ■基準性の明確化を受けた学習指導とその影響

以上見てきたように、学習指導要領の一部改正による基準性の一層の明確化とは、特に「内容の取扱い」に示される「内容の範囲や程度等」に関する規定にとらわれず指導できることを意味する。また、このことを、実際の学習指導として具現化できるような「発展的な学習」や「習熟の程度に応じた指導」が明記された。

一方、教科書に発展的な学習内容の記述を可能にしたことにより、発展的な学習の教材が準備されることとなった。

### (1) 指導上の留意点

一部改正を受けて、特に「内容の範囲と程度等」の規定にかかわらず指導する場合、次の点に配慮することが必要である。

第一に、評価の結果を生かし、児童生徒の学習状況を踏まえた取扱いとすることである。基礎的・基本的内容が十分身に付いているかどうかを判断し、その上で「はじめて規定」の取扱いを検討することが大切である。

第二は、「学校で特に必要がある場合には」との記述からも分かるように、安易に「はじめて規定」を超えた取扱いにならないよう、慎重に対処することである。各教科で必要に応じて「はじめて規定」を設けているのは、指導内容の特性や配当可能な授業時数等の観点から、そこに一定の意味があると考えられるからである。

第三に、「はじめて規定」にかかわらず指導する際、なぜその事項を取り上げる必要があるのか、指導上の意味等をよく吟味することである。例えば、中学校第3学年数学の「A数と式」には、「平方根表は取り扱わないものとする」との規定がある。この規定にかかわらず指導する場合、その意味や指導方法等について十分に検討し、指導計画を作成することが必要である。

### (2) 基準性の明確化の影響

発展的な学習や習熟度別学習がどのような内容で実施されるかは未だ明確でないが、今後は、学習指導要領が示す学習の到達度基準の在り方が問われてくるものと思われる。即ち、次の学年で学習すべき内容を既に学習して進級した場合、次の学年ではどのような目標、内容を設定するのが実際に課題になるからである。学校段階を超えた発展的な学習を行う場合についても同様の課題がある。

一方、教育課程の基準の示し方には、到達目標を重視するタイプ、目標と内容を併用して示すタイプ、内容を重視して示すタイプとがある。目標中心の示し方の場合、一定の期間内に習得すべき能力等を示す形をとるため、指導内容は必ずしも細かく規定されないことが多い。多くの国が目標・内容併用型をとっているが、我が国の場合、目標よりも内容をより細かく示すタイプといえる。学習指導要領の基準性を一層明確にすることは、学習指導要領における目標と内容の示し方、特に目標をどの程度重視して示していくかという課題につながるものと考ええる。

# 本当に「ふつうの子」が あぶないのか ——少年事件をよみとく——



教育評論家 斎藤次郎

## ■見過ごしてきた「ふつうの子」の現実

「ふつうの子が突然キレル」とマスコミが騒ぎはじめたのは、神戸連続児童殺傷事件（一九九七年）の半年後におきた、栃木県黒磯市での中学一年生による女性教員刺殺事件の頃からです。

新聞は、取材をとおして、その事件をおこした中学生に非行歴がなく、学校も「問題児」としてマークしていなかった点を確認して、「ふつうの子」と書いたのです。そこには、生命にかかわるような重大な事件をおこすのは、きわめて特殊な子どもに違いない、という思いこみが、いともかんたんにくつがえされた衝撃が示されてもいました。

半年前に「酒鬼薔薇聖斗」と名のつた少年の場合は、淳君殺害の前に「通り魔」的犯行で少女を殺害しています。そのまゝに猫を虐待していたという報告もありました。それらをつなげてみれば、彼が「ふつうの子」ではなかったように思えます。あの事件のショックがまだ消えないうちにおこった黒磯の事件の少年には、そのようなまがましい「前歴」は認められませんでした。ここから「ふつうの子不安」とでもいふべき社会心理が広がりはじめました。

さらにその後のことをいえば、少年事件が報道されるたび、逮捕された少年について、近隣の人々がこう証言するのを、ぼくたちはテレビでよく見聞き

することになります。「会えばあいさつするいい子ですよ」。「ふつうの子不安」は「いい子があぶない」ヘエスカレートしてきたのです。

確かに、いまではある特定の傾向をもった子どもに非行（や犯罪）に走る危険が大きいとはいいいくなくなっています。逆にいえば、全ての子どもに社会を震撼させる、あるいは嘩然とさせる事件を引き起こす可能性（危険性）があるともいえます。

けれどだからといって、それは全ての子どもに不安や猜疑のまなざしを向けなければならぬということではありません。いやむしろぼくたちがいま反省しなければならぬのは、「ふつうの子」や「いい子」の現実を、これまでいかに見ていなかったかという点ではないか、とぼくは思うのです。

## ■キレルにはキレルわけがある

最初に引いた「ふつうの子が突然キレル」というマスコミの言い回しで、特に気になったのは、「だからもう対処のしようがない」という現場の嘆きがそれにつづいたことでした。ノーマークの子どもが、突然凶行に及ぶのでは、未然に防ぐ手だても、わが身を守る余裕もないというわけです。

事故や事件は、大概突発的におこるものです。キレルという精神状態の激変も、むろん突然のことです。

す。しかし、キレルのにキレル理由があったことは確かです。腹が立つ、苛々する、子どもたちの言い方でムカつく——そういう不快が次第に強まり、自己制御できる限界をこえたとき、はじめて子どもはキレルのです。

キレルのは突然でも、キレざるを得なくなるまで怒りやムカつきが煮つまるのには、それ相応のプロセスがある、と考える方が妥当ではないでしょうか。とすれば、「ふつうの子が突然キレルのだから対処のしようがない」というのは、おとなの無為無策を合理化する言い草ではないか、とも思えるのです。子どもの内部で、キレルまでに煮つまり、ふくれあがるその苦しみのプロセスに気づこうとせず、さもプロセスそのものがなかったかのように子どもの事件を解釈するのは、フェアではないとぼくは思います。おとなたちが子どもの苦しみのプロセスに気づけなかったのは、無理もない事情がきつとあったのでしょう。ぼくはそれを批判しているのではないのです。子どもの心が見えなかったくやしさを自覚的に引き受ける責任がある、ということを描きたいのです。

「ふつうの子」の内部に生まれ、増殖する怒りやムカつきや悲しみを、どのように察知するか、臨界点に達するまえにクールダウンする手だてをどう工夫していくか、そのことを「ふつうの子が突然キレル」事件から学んでいかなければならないはずだとぼくは思います。

## ■我慢を超える不安と緊張

かつては、子どもはもつと我慢強かったという人もいます。「突然キレル」のはその我慢する力が弱くなってしまったからだという説です。そういう面もきつとあるだろう、とぼくも思います。でも、子どもがかかえこむストレスやフラストレーションは時



代と共に変わってきました。そして、物質的に恵まれている反面、かつての子どもたちが経験しなかった種類の心理的な苦痛がふえつつづけているように思えます。我慢する力が弱まったのではなく、それを上回るほどの不安や緊張を強いられているからこそ、少年事件が増加しているのだ、と考えることはできないでしょうか。

黒磯の中学生は護身用としてバタフライナイフを買い、所持していたと伝えられています。ナイフで身を守るのはどういう敵からでしょうか。少年がだれかにいじめられていたとかおどされていたという事実は、あれほどマスコミが取材しても浮かびあがってはきませんでした。彼にとって敵とは特定の連れかではなかったのだろう、とぼくは思います。

自分を絶えずおびやかす見えない敵と、少年はたかかわなければならなかった。非力な少年はポケットの中でひそかにナイフを握りしめることで、その不安にうちかとうとしていたのではないのでしょうか。家族や友だちや先生といった彼をとり囲む人間関係の中に、無条件に彼を肯定してくれ、安心させてくれる場所がなかったのかも知れません。そういう少年の孤独な不安と心細さに気づき、寄り添ってくれる人がいたら、事件はおそらくおこらずにすんだでしょう。

## ■引き金を引くに至るプロセス

物騒な例ですが、ピストルを撃つというアクションを考えてみます。引き金を引くのが最終局面です。しかし、引き金を引いても弾丸をこめてなければ射撃はできません。弾丸をこめ、安全装置をはずして、それから引き金を引く、ということになります。

「突然キレる」ように見えるのは、この引き金を引くところなのですが、そして、それは衝動的にということも十分あるのですが、しかしその前には突然

ではないプロセスがあったはずです。子どもたちが孤独や、敗北感や、屈辱といった心理的な苦痛に耐えているとき、それは弾丸をこめたピストルを隠している状態なのだ、といってもいいのではないのでしょうか。

日本中の子どもたちが、みんなピストルを隠し持っているように、ぼくには思えます。けれど、引き金を引くのはよくよくのことです。もし不幸が重ならなければ、そしていくつかわ重なってしこりとなつてからでも何らかの方法で、それをとかすきっかけが見つかれば、引き金を引かなくてすむのです。

佐世保で六年生の少女が友人をカッターナイフで切りつけて死なせてしまった事件でも、マスコミはさまざまに「犯行動機」を推測しました。チャット上の悪口の応酬がきっかけだったかも知れません。その前に「交換日記」をめぐる、少女間の確執があったとも伝えられます。

けれどもおそらく、その前に加害者少女は十分に不幸だったはずです。孤独でもあったでしょうし、特定のだれかにしぼりきれない憤懣をかえこんでいたのではないかと、とぼくは考えています。ある日突然事件はおこるのですが、そこに至るまでには、「計画的だった」とマスコミが伝えるようないきさつのもっとずっと前から、人知れず悩み苦しんだプロセスがあったに違いありません。

## ■共感と応援のまなざしで

少年事件がおこるたび、おとなたちは性急にその原因を言い当てようとします。テレビや漫画の影響だとか、家庭環境のせいだとか、コンピュータ社会の弊害だとか、はては「いのちの大切さ」を知らないからだとか。全部が全部的はずれだとは言いませんが、子どもは単一の原因や理由で凶行に走るのではないと思います。わかりやすいものからわかりに

くいものまで、不幸が重層的にその子にのしかかり、次第に追いつめていくのです。

そして、その複数の不幸の層のどのひとつにも責任がないおとななんて、だれひとりいないのです。テレビのせいだ、と言う人はテレビ関係者ではありません。家庭のせいだと言う人は、その子どもの家族ではありません。佐世保の事件のとき、チャットに問題があると言った人は、おそらくチャットのヘビーユーザーではなかったでしょう。つまり、テレビのせいだと言う人は、テレビのせいで私のせいではないと主張しているのです。性急な犯人探しは、「私は無罪だ」と言いたいための、あるいは聞きたい人のための、そうやって早く事件を忘れてしまいたい人のための、儀礼的な操作なのです。

でも、残念ながら本当は逆です。子どもたちが引きおこす事件のほとんどに、むろん間接的にはありますが、ぼくたちおとなはひとりひとり責任を負っています。子どもを競争にかりたて、「よい子」の枠に押しこめようと、「問題児」や「障害児」を排除したが、そのくせまわりの目を絶えず意識して、心にもないことを平気で言い、思うことの半分も口に出せないおとなたちが、どうして子どもの前に「無罪」でいられるのでしょうか。

性急な犯人探しをやめ、自分に火の粉がふりかかるかも知れない子どもの不幸の真の原因に立ちむかうことが、いまぼくたちが取り組むべき重要なことだ、とぼくは思います。不安と猜疑の目ではなく、共感と応援のまなざしで、子どもをよく見ることで、不幸のプロセスのただ中にいる子どもたちを、ハラハラしながら見守ることです。事件の少年を「あいさつするいい子でしたよ」とテレビで語るおとなたちは、自分の目が節穴だったことを恥じるべきです。あいさつを聞きながら子どもを見ていなかったと、絶望的に後悔する「近所の人」を、ぼくはまだテレビで見たことはありません。



有田和正の  
おもしろ授業発見！⑤

## 大根の種はどこにあるのか？

— 高松豪先生のみごとな生活科授業 —

教材・授業開発研究所代表 有田和正

### 1. 生活科も教材によっては面白い

生活科で「これは面白い！」という授業を見るのは大変むずかしい。なぜなら、「みんなわかった気分」になって、マンネリ化しているからである。

マンネリ化しなくても、新しい教材を開発して、子どもに「へえ！」といわせるような授業をする教師が少ないから、なかなか目に止まらない。

面白い教材を開発して面白い授業をしている教師がいると思うけど、わたしの参観する範囲ではなかなかみつからない。

そうしたなか、1年生が熱中している生活科の授業に出会って、胸のすくような思いをした。まだ、6年目の教師だというのに、学年の先生方の指導や協力を得てみごとに追究する授業を展開していた。

### 2. たねからみえるもの

わたしが見たのは、単元が始まって22時間目であった。これまでに、朝顔の種調べから始まり、ナスの収穫をしたりしたところ、子どもたちが「種」に興味を持ち始めた。子どもの生活科ノートを見ると、実に多くのものの種調べをして、その絵を描いていた。

きっかけは、1本の朝顔に400近くの種があったことに驚き、ナスには何個くらい種があるのか、きゅうりはどうか、かぼちゃはどうかと、次々と調べるようになった。

このあたりの教師の指導もうまい。ほめてほめて、次々と調べるようにしむけている。

はじめは野菜の種調べだったものが、次第に広がり、果物の種調べへと発展したという。

単元名は「たねからみえるもの」ということになった。実にいいネーミングではないか。種からどんなものが1年生の子どもに見えるのだろうか。小さな穴から世界をのぞくような感じである。

### 3. みごとな授業の展開

#### (1) 野菜や果物には必ず種がある

教師は意図的に、種のあるものから学習を始めている。

先に書いた野菜には、みな種があり、よく見える。そのうち

果物を調べる。梨、柿、りんご、桃、ぶどう、みかん、きんかん、キウイフルーツなど、みな種があり、よく見える。

教師は、いちじくや栗、バナナのようなものも出したかったらしいが、あとのことを考えて、ここでは種のあるもののみをじっくり追究し、絵を描かせている。

これらを「秋の宝物」として遊びながら追究している。実にゆっくりゆっくりと、心ゆくまで調べさせ、食べさせ、描かせている。

これまでの追究で、子どもたちは、野菜や果物には「必ず種がある」と考えるようになっていく。そういうものしかあつたっていないからである。これは教師の意図的なはからいである。

#### (2) 大根はどこに種があるか？

「今まで調べた野菜や果物には、種がありましたか？」という問いで本時は始まった。「あった、あった」「大きいや小さいのもあった」「りんごや梨は、種の中に種があつたよ」「えっ？ 種の中に種があつた？」と教師の驚きの声。

しばらく、これまでの学習について話し合った後、突然、大根を提示して、

大根の種はどこに入っているのかな？

と問いかける。



子どもたちはこれまでの経験をふまえて、

- 上の方
- まん中
- 全体にバラバラにある
- ひょっとして葉っぱにあるかもしれない

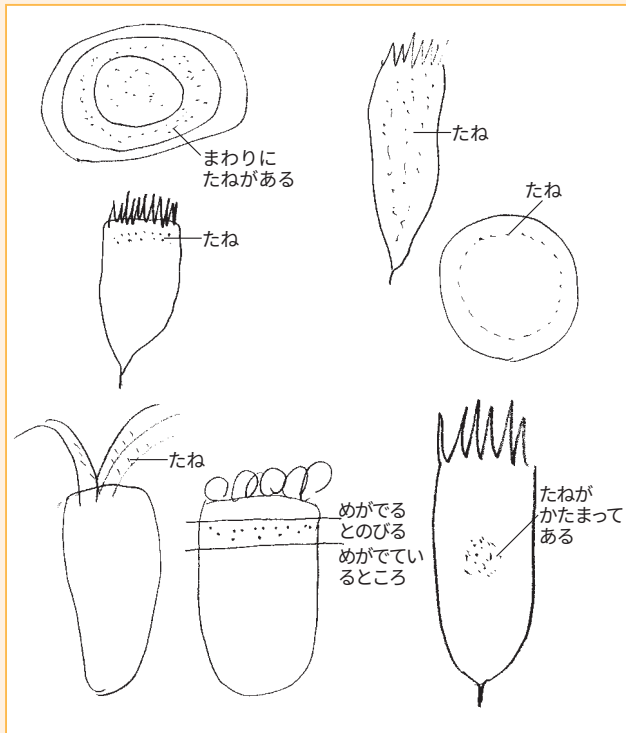
「大根の種は、種まきの時に見たよね」と、経験したことを思い出させる。今日のために大根を

作ったのであった。まさに深慮遠謀である。若い教師とは思えないほど計画的である。



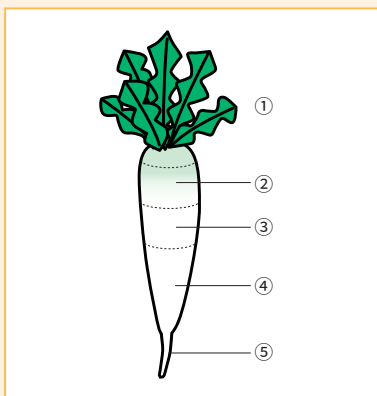
### (3) 大根の種の予想を描く

実にユニークな絵ばかりである。これまでの学習が生きている。



教師は、みんなの予想図を見てまわり、次のような絵を板書した。

そして、「①から⑤のどこに種がありそうか？」と、しばらく迷うとした。意見はまとまらなかった。



### (4) どうやって確かめたらよいか

意見がまとまらないので、「どうやって確かめたらよいか？」という発問をした。

「切ってみればわかるよ」と、いとも簡単にいう。

「切らなくても、まわりにあるかもしれない」という子もいる。

子どもが、「大根を早くくれ！」というので、とうとうグループごとに大きな大根を1本ずつ配った。そして、包丁の使い方の指導をした後、包丁を配った。

これから後の子どものすごいこと。わたしは目を丸くして見ていた。何しろ、いろいろな切り方をするのである。

輪切りにする、たてに切る、ななめに切る、小さく切りぎざむ、うすく皮をむいてみる、葉を切ってみる（それもたてやよこに切ってみる）等々、ここに書ききれないほど自由自在に切ってみるので、驚いてしまった。普段の指導がしのばれる。



切りながら、「どこにあるんだよー」といっている。

すごい子は、切ったらすぐにノートに絵を描いている。そして、「きったはんいには、たねはない」と書いている。

隣近所のグループと比べてみている子どももいる。勉強のしかたを知っている。比べる大切さを知っている。

教師が、絵を描いている子をみつけてほめた。すると、みんな描き始めた。このあたりの指導もぬかりないなあと感じた。

### (5) 大根を持ち帰ってよいか！

ついに種は見つからなかった。一人の子どもが「絶対にどこかにある。見つけてやる」と意気込む。

すると、「先生、この大根持って帰っていいですか？」という出ず。「いいよ」というと、早速ビニール袋を先生からもらって、切りぎざんだ大根を大事そうに中に入れた。きれいに後かたづけもできた。

さて、どうやって大根の種を見つけさせるのだろうか。春まで待つのか？ 楽しみだ。



# りんごを育て、生徒をはぐくむ

—— 学校農園の五〇年 ——

弘前市立東目屋中学校教諭 **前田 鉄昭**

「あつ」という間に愛用のジャンパーに穴があきました。東目屋中学校に赴任した平成八年四月、「枝

焼き」作業中のことです。剪定したりんごの枝を燃やして、舞い上がった火の粉がポリエステル製ジャンパーにふりかかったのです。以来、このジャンパーは農園作業専用です。最初から穴あきですから、何でもドンといいたところ

です。これが、弘前に住んでいながらりんご栽培に無縁だった私の農園活動のスタートでした。この農園活動では、四月の枝拾いから始まり、秋の収穫、校内の各コンテスト表彰まで、全校生徒・職員が一丸となって取り組みます。また農園活動だけでなく、さまざまなアイデアを出し合っ

て、りんご学習の幅を広げています。こうした活動ができるのは、地域や農協の方々をはじめ、食育を推進する青森県との連携がうまくできているからにほかなりません。

## 1 五〇年の歴史と伝統

昭和二二年、学校創立時に学校実習地用として地域住民より約四〇アールのりんご園が貸与され

たことが、本校の農園活動の始まりです。以来、半世紀の間には、何度か存亡の危機もありました。学力優先のために農園作業時間が取れないとか、病虫害に悩まされたり、あるいはりんご農家の経営不振など、さまざまな困難があつて、歴代校長は頭を痛めこともあつたようです。

しかし、時代も移り変わり、「総合的な学習の時間」が設定され、生きる力や確かな学力が問われている今日、学校農園は多方面への可能性を持つて再生されました。時間的にはやりくりも難しいのですが、学校農園の体験が、生徒たちにとって人間としての豊かな心や安全な食事（食育）について振り返る格好の場になっています。

## 2 “自分のりんご”づくり

農園作業は、枝拾い↓肥料まき↓人工受粉↓摘果↓草刈り↓袋かけ↓葉取り↓収穫↓市場への出荷・競りの見学の順を追います。生徒は原則として一人一本の木を担当し、各自が責任をもって作業を行います。

“自分のりんご”づくりは、美術の時間に制作したりんご看板を自分の木に掛けることから始まります。そして生徒同士協力しながら作業を進め、

収穫時には品種ごとに品評会を実施します。自ら選果して箱に入れ、全生徒の投票で賞を決定しています。この品評会は生徒の大きな励みとなり、りんごの質や収穫量を年々向上させています。

また、東目屋小学校の児童が、人工受粉・摘果・葉取り・収穫の作業に参加し、小・中合同での農園作業も行っています。この時、中学生は先生役となり、教えることの難しさを実感しながら、がんばって一緒に作業しています。

昨年の市場への出荷数は、つがる五箱、千秋七箱、スターキング二箱、ジョナゴールド三八箱、北斗二〇箱、ふじ四九箱、王林三一箱の計一五二箱でした。主力品種のふじと王林の競りには小学生とともに見学に行き、自分たちの活動が外部の人たちにどう評価されるのかを知るよい機会となりました。





### 3 広がる「りんご学習」

農園活動のもう一つの柱に「りんご学習」があります。ここで、昨年度の生徒たちの主な活動を紹介します。

#### ●「りんご学習発表会」の開催

二・九人の一六グループに分かれ、ジャンル別に研究テーマを設定し追究していく活動で、りんご学習としては初の試みです。ジャンルは、カルチャー（歴史等）、サイエンス（品種や病気等）、アート（デザイン・マスコット制作等）、ライフ（料理等）の四領域で、発表会には小学校の児童も参加しました。生徒は初めての発表会にとまどいながらも、劇を取り入れたり、コンピュータ・ビデオなどを活用したり、随所に工夫が見られました。



●市場見学（りんごの競り）



●絵・文字入りりんご



●オリジナル・ジュースラベル



●修学旅行でりんごPR

#### ●絵・文字入りりんごをフランスへ

例年、自作の絵や文字をコンピュータで画像処理して転写シールを作成し、りんごの表面に転写して、文字通り「世界に一つだけのりんご」を作ります。今年は、フランスで行われる絵入り果実の国際展示会に転写りんごを出品する予定です。

#### ●好評！りんごジュースラベル

学校農園のりんごを原料としたりんごジュースには、その一本一本に生徒が作った個性あふれるオリジナルラベルが貼られ、好評を博しています。

#### ●壁面を飾る「りんご個人新聞」

生徒一人一人がりんご新聞を作ります。個人テーマと農園作業の記事は必ず入れるようにします。



●人工受粉（後方は岩木山）

### 4 受け継がれてきた宝物

六年前から修学旅行時に学校農園りんごのPRをしています。今年は東京でりんごの販売を体験し、目黒区立の小学校にりんごジュースをプレゼントし、りんご栽培について発表しました。

#### ●修学旅行でりんごPR

学校農園は、全校生徒と職員が時には泥んこになり、時には汗だくになりながら最高のりんごづくりを目指す場であり、また最高の人づくりを目指す場でもあります。在校生のお祖父さん、お祖母さん、お父さん、お母さんの中には、農園活動経験者が何人もいます。そして、現在はPTAとして支えてくれています。

農園活動は、長い歴史の中で紆余曲折を経て受け継がれてきました。その見えない力が生徒たちの笑顔に表れています。学校農園は、今、本校の何ものにも代えがたい大切な宝物です。

## ■ 山形県 ■

**ISOの趣旨を生かした環境教育**

—地域の緑の中で、かしこく・やさしく・たくましく—

天童市立山口小学校校長

**岸 康弘**

本校では、環境教育の重要性が叫ばれる以前から、ふるさとの自然を生かした体験活動に取り組んできていた。緑の少年団活動もその一つである。昭和52年に発足し、今年は28年目を迎えた。また、学校には20アールの畑があり、各学級で栽培活動に取り組んでいる。さらに、学校林（留山、水晶山）を学習フィールドとしたふるさと探検活動を実施するなど、自然の中で多くの地域の方々とかかわりながら豊かな心を育んできたのである。

こうした中、天童市では平成14年度にISO 14001の規格による環境マネジメントシステムを立ち上げた。これは、実施組織として、市の公共施設に市内の小・中学校17校を加えたもので、全国的にも数少ない事例として注目された。本校では早速、ISOの趣旨を生かそうと、環境教育について見直しを図った。そして、これまで大事にしてきたように、本地区の特色を生かした自然体験や栽培活動を通して、自然の仕組みや大切さをより実感させていきたいと考えた。

昨年度、5年生が「レスキュー、ぼくらの地球号」という総合的な学習に取り組んだ。緑の少年団活動、栽培活動やふるさと探検活動等のさまざまな下地をふんで、リサイクル、オゾン層の破壊、大気の流れと温暖化等の環境問題に関心を持つようになった。課題を追究しながら、自然との共生、自然環境の保護を強く意識するようになり、全校児童や地域の方々にも呼びかけた。

子どもたちの学習が、省資源・省エネルギー・リデュース・リユース・リサイクルの活動実践へ結びつく展開を始める中、平成16年2月、天童市はISO 14001認証を取得した。



## ■ 北海道 ■

**全校オペラから生まれる生徒の輝き**

函館市立光成中学校校長

**須藤康雄**

本校は全校生徒131名、全教職員19名（管理職・事務・公務補・栄養士・調理員を含む）の小規模校である。

平成13年度から全校生徒による手作りのオペラ「アイダ」を学校祭で上演している。

学校祭は、PTAバザーと協賛して行われるもので、保護者はもとより地域、そして老人ホーム等の人たちも招いて行われる地域の一大イベントとなる。

オペラ上演については、全校生徒がスタッフでありキャストとなる。

本校の一年はオペラに始まる。3月のメインキャストオーディション、4月のスタッフ選択（プロモーション・記録・舞台装置・衣装・メイク・ダンス・照明・演出・音楽）、5月からは9月最終土・日の本番に向けて企画を立て、会場中を一つに包み込む「総合舞台芸術」を創りあげるのである。

生徒の手による全校オペラの創造では、全職員は生徒の援助をするアドバイザーとして関わり、あくまで生徒主導で活動が展開される。

初年度こそ、職員側がある程度先導する形で活動をしたが、その活動の全てを映像で残し、次年度からは記録を参考にしながら生徒たちが自主的に活動できるようになってきている。

3年目の取り組みでは、3年生は3度目のオペラ。光成中全校オペラの歴史を作ってきた生徒たちが主導となると、活動はいよいよスムーズになり、充実感や達成感が伝わるものとなった。

当日のステージは熱気に包まれたものであり、そのステージに立つ生徒たちの瞳の輝きは誇らしくもあり、自信に満ちあふれている。





## ■ 愛媛県 ■

宇宙メダカ・ランド  
「めざせ、1万匹！」

今治市立常盤小学校校長

倉永 忠

本校は、「しまなみ海道」四国の玄関、今治市のほぼ中央に位置する。平成7年から、宇宙メダカを飼育・観察している（宇宙メダカとは、1994年宇宙飛行士向井千秋さんとともにスペースシャトルで宇宙に飛び立ち、産卵・孵化したヒメメダカの子孫である）。

飼育開始から5年がたち、6匹から数百匹にふえた平成12年、「宇宙メダカをもっとふやしたい。今治市のみんなにプレゼントしたい」という子どもたちの思いから、1万匹増殖プランがスタートした。5年生全員がペットボトル水槽を作り、愛称をつけたり死んだメダカを手にして涙を流したりと、心を込めて世話をした。ゲストティーチャー“メダカ名人”を招いたときも、子どもたちは精一杯の準備・歓迎・お礼をした。

そして、目標を達成した子どもたちは、今治市の行事や宇宙少年団との交流に参加し、メダカを地域の人々に配布した。子どもたちの小さな思い、夢が実現したのである。その後も、宇宙メダカを核にした教育活動を継続している。ホームページ「宇宙メダカ・ランド」も、情報教育の一環として子どもたちの力で開設することができた。

平成14年には、“宇宙メダカの生みの親”東京大学助教授井尻憲一理学博士が来校され、「宇宙メダカを大規模に教育に取り入れている学校は全国でも少ない。子どもたち自身が育てることで、科学への興味、学習意欲も高まる」と励まされた。平成15年には、子どもたちが育てたメダカ3000匹が、宇宙飛行士毛利衛さんらの手で東京・六本木ヒルズの池に放流された。

今後も、宇宙メダカの飼育を本校の特色ある教育活動の一つとして位置付け、地球環境や宇宙に興味をもたせ、命を大切に、夢をもって力強く生きる子どもたちの育成に努めたいと考えている。

(本校HP <http://imabari-tokiwa-e.esnet.ed.jp/>)



## ■ 千葉県 ■

## 八街市の幼小中高連携教育

## 八街市教育委員会学校教育課

八街市では現在、市内の幼稚園3園、保育園6園、小学校8校、中学校4校、高等学校2校の計23校・園で連携教育を推進している。一人一人の子どもを学校種を超えて集団の中で育てること、卒園・卒業という区切りで教育を考えるのではなく、14年間という期間で子どもたちを育てていこうとする視点に立っている。

本市の連携教育には、3本の柱がある。

一つめは、子どもを主役にするための「学校改善」である。人とのふれあいを通し、人との関わり方・生き方を学ぶとともに、「授業改善」の一環として、小学校校での一部教科担任制などを実施している。

二つめは、集団生活をより豊かにし、基本的な生活習慣の定着を図るために、次の「継続指導6項目」を推進している。

- ①話を静かに聞くことができる
- ②指示を受け止め行動ができる
- ③あいさつができる
- ④正しい言葉づかいができる
- ⑤清掃ができる
- ⑥自学ができる（自分のことは自分でできる）

三つめは、「学校・家庭・地域との連携」である。これまでも子どもたちの健全育成を目標に、それぞれが取り組んできたが、さらに連携を深め、一丸となって取り組んでいけるよう工夫改善を行っている。

〔連携教育の一例〕

- 「生き方」教育を通じた学習・生活・進路指導
- 小学生の生活科の学習を通して園児と交流
- 6年生と中学1年生の中学校理解のための交流
- 「クリーン作戦」等地域の行事への児童生徒の参加

平成16年11月12日（金）、市内の学校・園をあげての公開研究会を予定している。多くの方々にご参観いただき、ご指導・ご鞭撻いただければ幸甚である。

(八街市教育委員会 電話：043-443-1446)



## 重松 清『教育とはなんだ』(筑摩書房)

## 鋭い質問力で明かされる教育の世界

評者 佐久間勝彦(千葉経済大学短期大学部)



重松清さんは確かめずにはおれない衝動に似た思い“に突き動かされ、識者一七人にインタビューを敢行した。

例えば「英語」の場合、書店には無数の英会話入門書があふれ、駅前には英会話教室の看板が並んでいる。《あえて挑戦的に言ってみる。／学校の教科の中で、「社会に出てからの応用性」と「教室で教わってきたこと」のギャップが最も大きいのは、英語ではないか。要するに、学校の英語なんてちっとも役に立っていないじゃないか——と》

そこで東後勝明さんに、「英語の教え手“の教師が、必ずしも優れた英語の話し手“ではない。——このジレンマはどう考えたらいいか」と、重松さんは聞いてみた。

東後さんはどちらかと言えば、「英語の専門性よりも人間的なほう」をとる。「先生が生徒をほんとうに一個の人格として受け容れられれば、教科の問題とか知識の問題ってというのは、あとからついてくるんですよ」と答えた。日曜日に英会話学校に通い、英語力を

高めながら授業に臨む。そういう「常に学ぶ姿勢」が、生徒の学ぶ力を育てていくというのである。

本書は、数学・国語といった教科だけでなく、給食・校舎・民間人校長など、普通なら取り上げられることない領域までをも粗上に乗せる。

重松さんは「あとがき」で述べる。《「教育」とは、なんだ——。／答えは、あえて言う、まだわかりません。考え中です。(中略) 安易で浅薄な「わかる」よりも、もっとたいせつな「わからない」があるはずだ、と。「わからない」の尊さや魅力を知ること、も「教育」の大きな役目の一つなんだ、と。／だから、ぼくはこれからも出来る悪い生徒でいたいと思う》

私は重松さんの当ててくれた光のおかげで、「わかっているようにうでいて、わかっていいる」と言いたい教育の「世界」の旅を楽しんだ。本書を読み終え、いくらか見通しのよい高みに立って、この世界を見つめてゆけそうな気がする。

## 渡辺一史『こんな夜更けにバナナかよ』(北海道新聞社)

## その人はなぜ、若者たちを「自分探しの旅」に誘ったのか

評者 興相寛(社会学者)



著者、渡辺一史のまえに現れた鹿野靖明は、全身の筋肉が徐々に衰えていく難病「進行性筋ジストロフィー」と闘っていた。呼吸筋の衰えにより、加齢とともに自発呼吸は難しくなった。ノドに穴を開ける「気管支切開」の手術をして、身体に「気管カニューレ」という樹脂器具が埋め込まれ「人工呼吸器」を装着した。生命を維持するためには、つねに誰かが寄り添って、呼吸器の管理や絶えず気管支に溜まる痰を吸引しなくてはならない。食べることや排泄することも、遊ぶことや外出することも、プライバシーのすべてにいたるまで、他者の介入なしには成り立たなくなった。

その人は、それでも既存の医療施設を拒みつづけた。執拗に地域社会に身を置き、「自立生活」をつらぬきつづけた。どんなに悲しみの淵に墜とされようとも、人との関わりをあきらめなかった。死の恐怖と真正面から向かいあいながら、けっして生きることをあきらめなかった。

心のなかに移りゆく喜怒哀楽の季節に寄り添いつづけた、五百人を超える介護者や若いボランティアたちとともに、自分の病いと、社会に立ちふさがる障壁と闘い抜いて、四十二年の人生を駆け抜けたのだった。

鹿野は、まるで現代のおとぎ話のなかに登場する「トリックスター」のように、自分に関わる人びとの善意の仮面をもぎとった。介助する者、される者の境界を、双方方向の人間関係に変えていった。ボランティアする者、される者という「ボランティア方程式」を打ち砕き、ともに同じ方向をめざす双方方向の関係に変えていった。他者と生きる宿命を身体に刻みつけた、その人の喜びと悲しみのまえで、なぜか、ボランティアする若者たちは、確実に人生を変えさせられていったのだ。

著者は、二年半の時間をかけて鹿野靖明の身辺に寄り添いながら、あまりにも誠実に自己と格闘するなかで四百五十ページを超える優れたノンフィクションを書きあげた。



Column

# 現代の家族と次世代を育む力

その1

渡辺秀樹 (慶應義塾大学教授)



## 1 ジェネラティビティ

アイデンティティという言葉は重要な概念として心理社会諸科学に導入しましたのは、精神分析学者のエリク・エリクソンです。周知のようにアイデンティティは青年期の発達課題ですが、壮年期の発達課題として彼が提示したのは、ジェネラティビティという概念です。これは生殖性などと訳されたりしていますが、日本への紹介者であります故小此木啓吾氏は「次世代を育む心」と表現しています (小此木啓吾・濱田庸子・山田康著『次世代を育む心』の危機 慶應義塾大学出版会、二〇〇四、を参照ください)。

いま、この概念がおおいに注目されています。たとえば、通称「心の教育」と呼ばれております中教審答申は、この小此木啓吾氏の問題提起を踏まえた表題になっていると、私は理解しています (私は当時の専門委員でした)。学問の分野においても、心理学や精神分析に限らず、社会科学の分野においても、あらたな社会を構想するときに「ジェネラティビティ」をキーワードとして議論されたりしています。

私は精神医学や心理学が専門ではなく、家族社会学および教育社会学を専門としています。そこで、ここでは人間個人というより、社会とくに家族に焦点をあてて、次世代を育

む構造的な力を問うてみたいと思うのです。「心」ではなく、構造的「力」を問題にしたのです。現代の家族は、それ自体として「次世代を育む力」を十分に保持しえているのかが問われています。連載初回の今回は、まず現代家族の特質について述べてみたいと思います。

## 2 養育環境としての現代家族

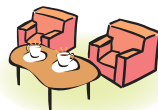
現代家族、といっても多様ですから、その特徴を画一的に描くことは注意を要します。しかし、子どもの養育環境という観点から、概略、次のことは指摘できるのではないのでしょうか。

第一に、家族のなかの養育担当者が少ないことです。父親が働き、母親が専業主婦の核家族では、母親のみが養育担当者ということになります。私は、これを家族における養育環境の単純化と呼んでいます。この単純な構造の意味は、まず危機に弱いといえるでしょう。母親が養育役割を果たせなくなるとき、それに代わる人が日頃から用意されていないのです。

さらに、単純な養育環境としての現代家族は、人間関係を形成する力を育む場としても弱いと思われませんが、続きは次回に述べたいと思います。

### 読者のページ

## Educo Salon (エデュコサロン)



### ●ご意見・ご感想をお寄せください

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10  
教育出版 Educo編集部

FAX: 03-3238-6975

e-mail: nakayoshi@kyoiku-shuppan.co.jp

●『Educo』は毎号、各界の第一線で活躍する著名な方々の人間教育にまつわるお考えや最新の教育情報など多彩な内容が掲載されており、いつも楽しく読んでいます。私は、教職員の研修講座であいさつや講話を担当する機会に、ときどき『Educo』の掲載事項を利用させていただいております。春号では特に中村哲先生の生き方に深い感銘を受けながら、最近の政府による自己責任論の浅薄さ、政治家の志の低さに、日本の行方を憂えています。今こそ社会と教育の場での、中村先生のような志高く生きようとする人づくりこそ、日本社会には最も大切なことだと思っています。(新潟県 松田正實)

●『Educo』春号「3R学習への招待」を読ませていただきました。私たち伊勢市も、“ゴミ問題”に取り組んでかなりの期間が経過しています。私自身、市民会議の一員やリサイクルプラザの運営委員として、いろいろなかたちで学校現場へ呼びかけています。この記事を今後参考にして、3R学習を総合的な時間に取り入れるよう努力したいと思います。(三重県 大藪記三)

●学校教育は、今、大きな転換期にあります。制度改革などにより、現場で直接教育に携わる教職員やそれを支援する教委の職員の本当に真剣な取り組みが問われていると思っています。そんな観点から考えると、『Educo』で取り上げられる異業種の方々のものの見方、考え方、さらにはそれに裏打ちされた強烈な実践に、より大きな興味と関心が湧き上がってきます。今後ともそうした内容の充実を期待しております。(埼玉県 石川正夫)

●『Educo』春号「『これからの時代に求められる国語力について』(文化審議会答申)の解説」の「国語教育の在り方」について、私たちの研究会の会員で読み合わせながら一語一語確かめました。特に、情緒力の育成については、具体的な学習の場で子どもの活動を想定して理解に努めました。今後の研究会の方向を見出たようです。(青森県 葛西和一)

●福祉の現場で働いている私は、人が亡くなる場面に直面する度に、この方の人生は充実して

いたのだろうか、生きていることは楽しかったのだろうかという思いにとらわれます。と同時に、自分自身の生き様の総点検をさせられるのです。日々、楽しく充実して生きているかを問い直しています。すばらしい人に出会い、良書に触れ、少しでも成長し、生きてよかったと思える人生を歩みたいと切に思います。そういう意味で、『Educo』誌は時代の最先端でご活躍されている様々な分野の方々の活動や、価値観・感性に触れることができ、読んでると大いに励まされます。(長野県 永瀬久美)

●7、8年前、美瑛ヘルシーマラソン大会にゲスト出場した増田明美さんが、あいさつの中で「マラソンは“ランランランの気持ち”で楽しみながら走りましょう」と話されていたことを思い出しました。今、彼女はスポーツジャーナリストとして「ランランランの人生」を楽しんでいるように思います。『Educo』春号の「ほっとな出会い」での彼女との再会を機に、私も“ランランランの人生”を過ごすべく努力したいと思います。(北海道 小平邦司)



## ほっとな出会い

KURIYAMA HIDEKI

# たった一言が自分を変えてくれた

栗山英樹さん(スポーツキャスター)

### ◎落ちこぼれの日々

僕は一九八四年、テストを受けてヤクルトに入団しましたが、プロ野球は想像を絶する世界でした。こんなにもレベルが違うのかと思い知らされ、野球をやるのが恐くなりました。それまで多少の自信を持っていただけに、自分がなくなつたと自覚した瞬間、精神的なプレッシャーで今までできていたこともできなくなっていました。

人間って、何事に対しても不安を抱えていると思いついて取り組めなくなります。ダメかもしれないと思った打席は一〇〇%打てません。バッティングピッチャーの球を打つても内野の頭も越えませんでしたし、最初の練習試合ではエラーをしてしまいました。

ますます自信をなくして、自分はここにいないんじゃないかと悩みました。これがいわゆる「落ちこぼれ」の感覚というのでしょうか。

練習を終えて夜遅く一人合宿所へ帰り、ふとんに入ってもなかなか眠れない日が続きました。大げげでもしてやめちゃえば楽になるのにと何度も思いました。

### ◎「人と比べるな」

そんな最悪の状態だった時、二軍監督の内藤博文さんが、全体練習の後、「栗、やろうか」と声をかけてくれました。マンツーマンで練習をみってくれるのです。内藤さんは、巨人軍のテスト生一号でレギュラーをとった方です。二軍でも、将来チームの中心になる選手をメインに練習メニューが組まれており、僕らが特打とか特守をやるということはありません。

せんから、涙が出るほどうれしかったです。

ところが、いくら練習してもなかなかいい結果が出ません。僕と同期生に、ドラフト一位で入団した高野光がいますが、彼は新人で一軍の開幕投手をつとめたほどの選手で、同じ年なのにどうしてこんなに差があるのかと、ますます落ち込んでいきました。

そういう僕の気持ちを透かしたように、内藤さんは僕を呼び、一言、「栗、人と比べるな」と言われました。「俺は、お前がほんのちょっ



現役時代は内外野を守るスイッチヒッターとして活躍。  
1989年外野手としてゴールデングラブ賞受賞。

とでもうまくなつてくれたら、それで満足だ。

一〇個エラーしていたのを、明日ゼロにしろといっているのではない。明日九個になればいいじゃないか」と言ってくれたんです。この一言が僕を非常に楽にしてくれましたし、次の日から野球に集中できるようになりました。

### ◎内藤さんが激怒したこと

期待に応えられないでいる僕に対して、いやな顔もせずに「栗、やろう」と声をかけ続けて

くれた内藤さんが、一度だけ激怒したことがあります。ある時、「栗、一つだけ聞く。入団時にゼロの力しかない選手と八〇の力のある選手がいたでしょう。その後、ゼロの選手が六〇まで力を伸ばして、一軍と二軍を行き来するようになった。一方、八〇の選手は九〇の力をつけてレギュラーになった。栗、どっちの選手がえらいと思う」と聞かれたのです。

プロは競争の世界であって、ポジションは九つだけです。レギュラーを獲得した方がえらいわけですね。

そこで、「当然、レギュラーの方がえらいです」と答えると、内藤さんに「ふざけるな」と一喝されました。「六〇も力を伸ばした人間の評価ができないお前は、どんな社会でも絶対に一人前になれない。荷物をまとめて帰れ!」と恐ろしい剣幕で怒鳴りつけられたのです。

### ◎最後の消化試合で一軍へ

今、教育の現場でも絶対評価が取り入れられているようですが、相対評価があたりまえのプロ野球の世界で、内藤さんは個人の生き様をきちんと評価してくれる指導者でした。

プロ一年目、僕はイースタンリーグで記録的なエラーをするんですけど、たまたま打率がよくて、最後の消化試合で一軍にあげてもらいました。

もし、あの時、内藤さんに会っていなかったら、満足な練習もせず、何の結果も残せず、僕の野球人生は終わっていたでしょうし、今こうして好きなスポーツの世界で仕事をするのもなかったと思います。すばらしい指導者に出会えたことを本当に感謝しています。

## なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命のびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。

●少年事件が起こるたびに、その原因を詮索してことを済ませようとする風潮に対して、斎藤次郎さんは、事件を起こすに至る少年の苦しみのプロセスに気づかなかった大人の過失を問題にする。では、彼らとどうつきあったらよいか。もどかしいけれど、共感と応援のまなざしで見守ろうという斎藤提案に心を傾けたい。

●少年事件と関連して、家族のありようがクローズアップされている。父親が権威をなくし、母親は孤立し、家族関係が脆弱になり、教育機能を喪失してしまった現代家族。それらの諸課題について、渡辺秀樹先生が教育社会学の立場から考察し、家族の教育機能はどのようにすれば回復できるのかを模索する(3回連載)。